

福島市立図書館(第一次)の成立と明治後期の 殖産興業政策の関連を探る

Exploring the relationship between the establishment of the Fukushima Municipal Library
(the first) and the policy of reproduction and development in the late Meiji period

和 知 剛

Tsuyoshi Wachi

はじめに

現在の福島県立図書館の成り立ちは少々複雑である¹⁾。まず福島市立図書館(第一次)として、1908(明治41)年に当時の皇太子嘉仁親王(のちの大正天皇。本稿では「皇太子行啓」を除き、即位以前は「嘉仁親王」に統一する)が、1908(明治41)年9月に東北地方を行啓したことを記念して、「行啓記念福島図書館」として福島市腰ノ浜(現在の福島市松木町)に開館する²⁾。その年の9月15日に開館式を行い10月11日より閲覧に供したという³⁾。この図書館を、本稿では1985年に再開館した福島市立図書館と区別するために、「福島市立図書館(第一次)」とする。

福島市立図書館(第一次)はのち1927(昭和2)年に福島市本町の福島ビルディング(福ビル)に移転し、1929年に福島県立図書館に一切を譲って廃止された⁴⁾。その後しばらく「福島市立図書館」は存在しなくなる⁵⁾。現在の福島市立図書館(こちらを「第二次」とする)が福島県立図書館の再移転に伴って、それまでの福島県立図書館の建物を利用して再開館するのは1985年のことである。

本稿では、福島市立図書館(第一次)の開館に際して「皇太子行啓」が何らかの役割を果たしたのか、あるいは開館を彩る要素のひとつに過ぎなかったのか、残された資料からその痕跡を探っていく。

1908年頃の国内公共図書館の状況⁶⁾

1908(明治41)年頃のこの国の公共図書館の状況をかいつまんで述べると、1897(明治30)年に東京図書館から改称した帝国図書館の新館が落成したのが1906年のことである。また、1902年に開館した私立図書館である南葵文庫⁷⁾の新館が落成したのが、この嘉仁親王の東北巡啓直後の1908年10月である。1907年には日本文庫協会が「図書館雑誌」を創刊し、さらに1908年2月には日本文庫協会は日本図書館協会に改称する。

福島県内の公共図書館は、1897(明治30)年に日本組合若松基督教会が若松市内に開館した私立若松図書館がその嚆矢である。その後、私立川辺図書館(石川郡泉村⁸⁾、1894年)、私立郡山金透図書館(郡山町⁹⁾、1895年)がこれに続いた。公立の公共図書館は1904年2月に開館した会津図書館が福島県内で初めての公立図書館だった。福島市立図書館(第一次)は、会津図書館に次いで福島県内で2番めに開館した市立図書館であった。

1908年の皇太子(嘉仁親王)による東北巡啓(福島県行啓)

さて1908年の東北巡啓については、『大正天皇実録』¹⁰⁾に訪問先が詳細に記録されており、また大正天皇の伝記類¹¹⁾でも東北巡啓が取り上げられているが、福島市のみならず東北6県においておおよそ公共図書館(当時の呼称では「通俗図書館」か)を訪問した、という記事が管見の限りでは見当たらない。そもそも、原武史『大正天皇』¹²⁾によれば嘉仁親王の行啓は、表向きは「授業で学んだ地理歴史を実地に見学する」ことを目的としており、1908年の福島県行啓においても『大正天皇実録』には、白河において「福島県知事西沢正太郎、戊辰戦役東西両軍交戦の状況に就きて説明するを聴かせらる。」、会津若松において「西沢知事より戊辰戦役若松城攻囲の状況に就きて説明を聴き給ふ。」などの記述が見られる。

嘉仁親王が戊辰戦争に関する歴史を聴くのは、この「皇太子行啓」が開始された当初は嘉仁親王自身の地理歴史の勉強の一環であったこともさることながら、加えてこの行啓が東北地方の人心の慰撫(嘉仁親王の訪問により、東北地方の住民における、薩長藩閥政治に対する不平不満を、なだめておだやかにする)をも目的としていたからではないかと考えられる。

また、学校への訪問もそこかしこで行われており、この行啓において福島県内では、福島県立会津中学校、福島県立工業学校、福島県師範学校、福島県立養蚕学校、県立福島中学校、県立福島高等女学校(それぞれ名称は『大正天皇実録』による)をそれぞれ訪問している。

これらの訪問先から、教育に対して「皇太子行啓」が熱心だったことは間違いないと考えられるが、教育以上に皇太子行啓が重視していたのは、歴史の教科書にも「明治政府のふたつの目標」と紹介される「富国強兵」と「殖産興業」だったのではないと思われる。本稿が考える対象としている福島県内の行啓でも、嘉仁親王は軍事について、会津若松や福島で「馬匹」を見物したり、会津若松に駐屯していた「歩兵第六十五聯隊」の教練を見学したりしている。

馬匹については、この頃は、まだまだ馬が軍用(軍馬)として重視されていた時代だった¹³⁾。福島県行啓でも猪苗代、湖南、福島市と馬匹を見物した旨、『大正天皇実録』に記載があり、これは当時の福島県が馬産地であったことに加えて、嘉仁親王自身が馬の見物に入れ込んでいたのではないだろうかと思われる。のちに首相を務めた原敬が嘉仁親王の馬の鑑識眼に吃驚した話が『原敬日記』にあるのが参考になる。

また工業については、会津若松では福島県立工業学校における「漆工科の木地漆・丸物漆・

板物漆の実習、蒔絵科実習、染織科の機械及び色染実習、窯業科の轆轤・模型・陶画等の実習並び若松市及び会津五郡物産陳列所等」、二本松では「旧二本松城なる双松館製糸場」、川俣では川俣絹布精練株式会社・日本絹布精練株式会社、福島では福島県立養蚕学校の「同校生徒の成績品陳列室・標本模型陳列室・養蚕実習室・蚕兒解剖顕微鏡実習室及び製糸実習室」、福島県工業試験場の「試験部・製糸講習部・製糸伝習部・模範工場部」および合資会社共同生糸荷造所の「入荷検査部・捻造部・生糸試験室・品位鑑別室・荷造場」をそれぞれ見学している。

殖産興業と言っても、重工業は国家全体がその端緒についたばかりで、当時の日本の主要な産業は第一次産業(農業)であり、そして第一次産業の生産品を原料とする製造業であり、重要な輸出品は生糸であり絹織物であった。馬と同じように、こちらもまた福島県は有力な生産地のひとつであり、嘉仁親王の行啓もそのことを踏まえてのものだと推察される。

福島市立図書館(第一次)の成立と1908年の皇太子巡啓

開館当初の福島市立図書館(第一次)は、2023年6月まで福島地方気象台のあった場所(福島市松木町。旧町名は福島市腰ノ浜)に建設された。その建物は当時、「第1回奥羽六縣聯合馬匹共進會」¹⁴⁾開催の機会に改めて新築された福島県庁の、それまで使用していた旧庁舎の玄関・応接室・宿直室等は無償で譲渡され移築したものであった。それは「第1回奥羽六縣聯合馬匹共進會」開催にあわせて、ルネサンス様式の福島県庁舎を1907年に新築した際、福島県に県庁舎の新築のために福島市が提供した3万円の見返りだった¹⁵⁾。また、図書館の建物とは別に書庫が建設されたが、こちらは日露戦争時に設立された「軍事義会」における剰余金を寄付されて建設されたため「戦捷記念書庫」と称された。

そして嘉仁親王は、9月12日から15日まで福島市に滞在しているが、連合共進会が開催された跡地を訪れた記載が『大正天皇実録』にはあるものの、福島市立図書館(第一次)の開館式があった9月15日には福島駅から次の訪問先である米沢に向かって鉄道で移動しており、福島市立図書館(第一次)を訪問したわけではないし、もちろん開館式に臨席してもいない¹⁶⁾。その一方で、文部省の調査に基づく『全国図書館に関する調査一九二二年』¹⁷⁾掲載の一覧表では、他県の図書館が例えば「行啓記念山形県立図書館」「御即位記念西村山郡立図書館」などと名乗っているなかで、福島市立図書館はただ「福島図書館」として掲載されている。

東條文規はその著書『図書館の政治学』¹⁸⁾で図書館(公共図書館)と天皇制・皇室との関係について「国家的慶事を利用し、皇室の威光を借りた」¹⁹⁾とし、その例証として「大正大礼」(1915[大正4]年)、「昭和大礼」(1928[昭和3]年)、「紀元2600年」(1940[昭和15]年)についてそれぞれ論じている。しかし1908年の皇太子行啓(東北巡啓)および福島市立図書館(第一次)の開館は1908年という、東條が取り上げている3つの国家的行事より以前の時期に行われたことである。『福島県立図書館三十年史』によれば、福島市立図書館(第一次)は1907年2月に予算化され、同年

7月に工事が始まり12月に竣工している。当時の公共図書館は図書館令により、開館には文部大臣の認可を必要としたが、福島市立図書館(第一次)の認可は1908年2月27日である。そして原武史『大正天皇』によると嘉仁親王の東北巡啓が決定したのは1908年7月7日のことだった²⁰⁾。少なくとも福島市立図書館(第一次)の建設は、「国家的慶事を利用し、皇室の威光を借りた」と言い切れるような実態を伴っていたわけではないと考えられる。

むしろ、福島市立図書館の建物が「第1回奥羽六縣聯合馬匹共進會」の開催にあわせて福島県庁舎が新築された際に、福島市が福島県に提供した3万円の見返りであったことと、書庫建設のための資金提供を「軍事義会」から受けたことの方が、福島市立図書館(第一次)の成立を推進する、何らかの役割を果たしたものと考えられる。そこで、ここでは「共進会」および「第1回奥羽六縣聯合馬匹共進會」について概観を試みる。

「第1回奥羽六縣聯合馬匹共進會」について

「共進会」とは、現在でも肉牛などに関して盛んに開催されているイベントである²¹⁾。『国史大辞典』によれば「共進会」とは

明治初年以来殖産興業政策の一環として各地で開催された産業技術交流のための展示会、集会。明治政府は立ちおくれたわが国産業の発達を促進する目的をもって明治初年以来海外の万国博覧会に参加し、国内でもしばしば博覧会・共進会を開催した。最初の共進会は明治十二年(一八七九)九月横浜で開催された製茶共進会である。(後略)

というものである。東北地方においても主に農林水産業産品およびその加工品に関する共進会が明治10年代より何度も開催されている。

福島市立図書館(第一次)の開館直前(1908年5月)に開催された「第1回奥羽六縣聯合馬匹共進會」については『第一回奥羽六縣聯合馬匹共進會事務報告』²²⁾(以下『事務報告』と略)という冊子が残されている。以下この『事務報告』を参考に、この共進会が開催された背景について確認してみる。

『事務報告』の「第一章 沿革」によれば、それまで5回にわたり開催されてきた「奥羽六縣聯合共進會」においても馬匹の出品があり、また各県において開催された共進会でも馬匹の改良発達に努めてきたところだがなお不足のあるところ、日露戦争の大陸戦では馬匹の重要性が再認識され、政府も内閣総理大臣直属の直轄機関として馬政局を新設し、改めて産馬を奨励し始めた²³⁾。そこで、東北六県もこれまでの共進会における小規模な出品ではなく、独立した大規模な馬匹共進会を開催することとした。これが「第1回奥羽六縣聯合馬匹共進會」である、ということになる。筆者は先に「殖産興業」の奨励が皇太子行啓の主な目的のひとつ、としたが、こ

の馬匹共進会は軍馬の生産という、殖産興業のみならず明治政府のもうひとつの目標であった「富国強兵」政策にも寄与する重要な役割を担わされていたものだったことが確認できる。

第1回奥羽六縣聯合馬匹共進會の会場は福島市仲間町三十三番地であり、ここに約五千坪の敷地を福島信託会社より無償で借り入れ、14棟の施設を建て馬場を整備していた。『事務報告』に掲載されている会場の図面によると、馬場や厩舎はもちろんのこと、牛舎や煮炊場、喫茶店も設えられていた。なお、皇太子が訪れた「共進会跡」を『大正天皇実録』は仲間町ではなく、現在の国道115号線を挟んだ東側の「豊田町」としている²⁴⁾が、こちらも江戸時代は「馬喰町」と言った宿場町であり、馬の仲買人で賑わっていた町であるので、記録者の勘違いでもあったろうか。なお豊田町内を南北に、信達軌道(のちの福島交通飯坂東線[路面電車])が1908年4月より開通していたのも、馬匹共進會の開催と何らかの接点があったのだろうか。

この共進会跡地が福島市立図書館(第一次)の建設地であれば、さらに興味深いことになったのだが、共進会の跡地とは異なる場所(現在の福島市松木町)に、福島市立図書館(第一次)は建設されたのだった。この立地については、『福島県立図書館三十年史』では「公会堂隣」と述べており²⁵⁾、福島市公会堂の隣接地であったことが選ばれた理由のようである。

取り敢えずの結語

本稿では『大正天皇実録』『第一回奥羽六縣聯合馬匹共進會事務報告』などの資料を見ながら、福島市立図書館(第一次)の成立と、皇太子行啓や富国強兵・殖産興業との関連を探ってきたが、現在のところ「福島市が共進会絡みで寄付した3万円の見返りに旧県庁舎の建物を無償譲渡された」以外の、明確な関連を見出すことができていない。とはいえ、福島市立図書館(第一次)の建物が文教政策の見返りではなく、富国強兵・殖産興業に絡むイベントの見返りであったことは間違いなく、このことは現在の公共図書館を取り巻く状況に照らしても、経済状況の好転あるいは悪化が公共図書館の運営基盤に影響をもたらすことが、その萌芽期から現在に至るまで続いていること(そしてそのことは公共図書館が「皇室」「天皇制」という権威にすがって箔付けたところで何のご利益も得られないこと)を示唆しているのではないか。

今後は、さらに調査を進め、今回参照できなかった当時の新聞記事などを博搜しつつ、明治後期における福島県下の公共図書館を支える基盤について考察を深めていきたい。

注記：

1) 福島市立図書館の成立については、次の文献を参考にした。

- ① 福島市史 福島市史編纂委員会編、福島市教育委員会、1968.
- ② 福島県立図書館三十年史 福島県立図書館、1958.11

- 2) なお当時の図書館令により認可されたのは1908年2月なので、同年7月に公表された嘉仁親王の東北巡啓(皇太子行啓)を当て込んで建設されたのかどうかについては疑義無しとしない。開館式を福島市行啓に合わせただけなのかもしれない。
- 3) 福島市立図書館(第一次)の開覧開始日は『福島市史』が10月1日、『福島県立図書館三十年史』が10月11日とする。
- 4) 市立図書館から県立図書館に移管された公共図書館としては、他に同じく1908年に開館した福井市立図書館がある(1950年に福井県に移管され福井県立図書館となる)。
- 5) のち1985年、福島県立図書館の現在地への移転に伴い、空いた建物が福島市に無償譲渡されて福島市立図書館(第二次)が開館する。その土地は福島市が福島県に貸与していたものだった。本稿では1928年に廃館になった福島市立図書館を「第一次」、1985年に再開館した福島市立図書館を「第二次」と付して区別する。
なお福島市立図書館(第一次)の建物は、福島市立図書館の福島ビルディング移転後は福島県立福島測候所(のち福島地方気象台)に転用され、1970年代に取り壊された。写真が『図説福島県史』207ページなどに掲載されているが、鷹野弥三郎が『都市経営上から見た市福島』(1916)で述べているように「図書館とはこんなものかと、思わしむ様な権威のないもの」と評価されても仕方のないような建物だった。
- 6) この項目は主に次の文献を適宜参照した
 - ① 近代日本公共図書館年表：1867～2005. 奥泉和久編著. 日本図書館協会, 2009.9.
 - ② 福島県教育史 / 福島県教育委員会編. 福島県教育委員会, 1972-1975.
- 7) 南葵文庫については以下。
南葵文庫 | 東京大学附属図書館
<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/collectionall/nanki>
- 8) 現在の玉川村の一部。
- 9) 郡山市の市制施行は1924(大正13)年。
- 10) 大正天皇実録. 宮内省図書寮編修. 補訂版. ゆまに書房, 2016.12-2021.2.
- 11) 後述の原武史著以外では
 - ① 大正天皇. 古川隆久著. 日本歴史学会編集. 吉川弘文館, 2007.8.(人物叢書新装版; 通巻247)
 - ② 大正天皇：一躍五大洲を雄飛. F・R・ディキンソン著. ミネルヴァ書房, 2009.9.(ミネルヴァ日本評伝選)がある。
- 12) 大正天皇. 原武史著. 朝日新聞社, 2000.11.(朝日選書; 663)
- 13) この頃は、まだまだ馬が軍用(軍馬)として重視されていた時代で、福島県は全国有数の馬の産地だった(その名残りが東北唯一の中央競馬である福島競馬場)。皇太子は軍人としての地位も持ち合わせていたため、繁殖・飼育された馬を見物することは軍務の勉強の一環であった。
- 14) 「共進会」の表記は、「第1回奥羽六縣聯合馬匹共進會」のような特定の共進会を指すときは、旧字体で「共進會」とする。
- 15) 福島市は、福島県庁舎新築への3万円の拠出とは別に、「第1回奥羽六縣聯合馬匹共進會」に2万円を拠出している(『事務報告』による)。
- 16) 『大正天皇実録』によれば「十五日、午前八時十分御旅館福島県庁御出門、福島停車場にて汽車に御搭乗」とあり、福島市立図書館(第一次)の開館式に出席した形跡は認められない。『福島市史』の「その開館式は東北行啓の東宮殿下(のちの大正天皇)を迎えて九月十五日に「行啓記念福島図書館」とし

- て挙行されたものである。」という記述は、今更ながら「嘉仁親王が開館式に臨席した」という誤解を招くのではないか。
- 17) 全国図書館に関する調査. 大正10年3月現在. 文部省編. 日本図書館協会, 1978.7. (復刻図書館学古典資料集).
- 18) 図書館の政治学. 東條文規著. 青弓社, 2006.1. (青弓社ライブラリー; 44).
- 19) 注18. 9ページ
- 20) 嘉仁親王の東北巡啓(皇太子行啓)は1902年に一度計画されていた(北関東巡啓に続けて予定されていた)が、嘉仁親王の体調不良により中止になっていた。
- 21) 例として第12回全国和牛能力共進会は2022年10月6日から10月10日まで、鹿児島県霧島市において開催されている。
全国和牛能力共進会 | 全国和牛能力共進会は和牛の能力と斉一性の向上を目指して開催される共進会です。
<http://cus4.zwtk.or.jp/zenkyo/>
そして第13回は、2027年に北海道十勝地方で開催される予定である。
第13回全国和牛能力共進会北海道大会 | 北海道十勝 音更町
<https://www.town.otofuke.hokkaido.jp/keizai/noringyosha/oshirase/chikusanjoho/2027wagyuzenkyo.html>
ところで共進会は、国内で開催されていた「勸業博覧会」と同種のイベントであるが、「共進会」という名称の由来や採用された理由、勸業博覧会という名称との棲み分けは調べてもよくわからなかった。なお後考を待つ。
- 22) 奥羽六県聯合馬匹共進会事務報告 第1回—国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/841603>
- 23) 『事務報告』によれば、「第1回奥羽六県聯合馬匹共進会」に際して馬政局長官は韓国出張中、馬政局次長は病氣療養中のため、ふたりとも臨場することはなかった。
- 24) なお『大正天皇実録』では「豊田町馬匹共進会跡に臨み、馬匹を御覧あり」とある。豊田町は、国道115号線を挟んで仲間町の東側に位置する。豊田町はもと馬喰町といい、奥州街道の宿場として名前の通り馬の仲買人で賑わっていた地域である。現在の町域北端には仙台北口枡形がおかれていた。また、町域の西側(現在の国道115号線の上)に馬場が設置され、馬競りが行われ賑わっていた。北側に隣接して馬頭観音堂が設けられていた。
- 25) 注1)の②. 1ページ

